

節蔵（『灰燼』）とメフィスト、 あるいは「ニヒリズム」の行方（承前）

——鷗外と『ファウスト』（その四／２）

田中 岩男

8. 二つの自然 — 二つの時間、あるいは「ニヒリズム」の行方

およそ時間の秩序は根本的に自然（宇宙）の秩序に照応し、畢竟そこに帰するのかもしれない。というのも、近代的な時間意識の淵源を探つてゆくと、必然的に16世紀に起こった自然（宇宙）観の大転換に逢着するからである。ゲーテは『色彩論・歴史篇』（1800）、「16世紀」の部の「中間考察」においてコペルニクス（1473-1543）——歴史上のファウストの同時代人でもある——の地動説について、つぎのように述べている。

しかしあらゆる発見と確信のなかで、コペルニクスの学説にもまして人間精神に大きな影響を及ぼしたものはないだろう。この世界がひとつの球体であり、自己完結するものと認定されたのもつかの間、世界は宇宙の中心であるという途方もない特権を放棄しなければならなくなった。おそらく人間精神に対してこれ以上の要求がなされたことは、かつてなかったであろう。というのも、このような認定によって何もかもが霧消してしまったからである。

いわゆる「科学革命」の幕開きであるが、そこで転換されたパラダイムは単に天文学上のそれにとどまらず、その作用は人間精神に両義的にはたらいた。すなわち、それなりに安定していたアリストテレス=プトレマイオス型の宇宙モデルのもとで世界の中心として自己完結していた人間は、不意に拠って立つ足場を突き崩される。それは人間精神を広大な世界へと解放する一方で、人間を宇宙の片隅の一存在へと相対化する力として作用した。が、他方この転回こそが、やがて同時に自然に対する人間理性の優位へと反転するのである。すなわち、いわば「アルキメデスの点」として世界全

体から切り離され、その外に屹立することを余儀なくされた意識主体は、世界を己れの「理性」によって理解可能な対象として想定し、自然に対する完全な支配権を獲得しようとする。ここに始まる新たな「人間中心主義」が、近代の性格を決定づけることになる――。

「時間」もまた人間の働きかけの対象たることを免れなかった。福井憲彦によれば、時間はなによりも神に属するものだとする捉え方から、やがて「人びとは徐々に時間を操作し、分割や計測の対象にしたりしだすことになった」という。

かつて時間が神に属するものであり、したがって歴史の進行は人の手のおよぶことのできないものだ、とみなされていた場合には、人びとの生は、いわば神によって与えられ、定められた歴史のひとこま、とでもいうべきものとなる。

〔……〕それはいわば予定調和的な安定した歴史観であり、死生観だったといえよう。しかしそのようなとらえかたは、時間と歴史が神の手をはなれはじめるとき、もはや崩れはじめざるをえない。時間が世俗的な、つまり人の働きかけの対象になるとすれば、歴史や、また歴史のなかでの個々人の一生も、人の働きかけの対象とならないはずはない³⁵⁾。

こうした「進歩時間論」(今村仁司)が近代科学の発展を促し、やがて産業革命を準備することになる。以下は孫引きになるが、ゲーテより2世代ほど後のフランスの経済学者・官僚ミシェル・シュヴァリエ(1806-1879)のこぼれである。最晩年のゲーテも購読していたサン＝シモン派の機関紙「ル・グローブ」の編集長をも務めた彼のことは、科学技術による自然の征服という「進歩的な」近代人の思想を典型的に示している。

それ自身では弱く貧弱な存在にすぎない人類は、機械の助けを借りて、この無限の地球の上に手を広げ、大河の本流を、荒れ狂う風を、海の満ち引きを我がものとする。機械により、大地の内臓から、そこに埋まっていた燃料と金属を引きだし、さらには、その燃料と金属を渡すまいと頑張る地下の大河をてなずける。人類は、機械を用いて、水の一滴滴を蒸気の貯水池に変え、力の貯蔵庫にする。地球のわきにおいたらひとつの原子にすぎない人類が、その地球を、倦むことなく従順に働く召使いにしてしまう。地球は、主人の監視のもとで、どんな過酷な

35) 福井憲彦『時間と習俗の社会史』新曜社、1986年、12頁以下。

労働もしてくれるようになる。人間のこのうえない力を思い知らせてくれるもの、それは、鉄道の上で荷物を運ぶために考え出されたあの独特の形の蒸気機関にほかならない（『北アメリカ書簡』パリ、1836年）³⁶⁾。

「海の権利をせばめ、／海に代わって主人^{あるじ}になろうとする」（V. 11093ff）ファウストの干拓・植民事業も、開発されたばかりの蒸気機関に象徴される「機械の助けを借りて」進められていることはまず疑いない。「夜になると、小さな炎がたくさん群がって、／翌朝には、ちゃんと土手ができていました」という媼のことばは、夜を徹して稼働する蒸気機関による排水作業を想起させる。だが注目すべきは、それがメフィストの「魔術」と同一視されてもいる（「どうも、あの仕事は、どこからどこまで／まともではありませんでした」）ことであり、そして時代の進歩に取り残された老人のたわ言では済まされないことである――。

ストックトン―ダーリントン間を世界最初の蒸気機関車が走った同じ年、ゲーテは（発送されなかった）ある書簡の草稿にこう記している。「いまや蒸気機関をとどめることができないように、道徳上のことでも抑えがきかなくなっている。取引は活況を呈し、紙幣は飛ぶように流通し、負債を返すために負債が増大する――これらすべてが、現在、若者がおかれている途方もない世界である。自然からほどよい落ち着いた心をさずかり、世間に対して不釣り合いな要求もせず、また世の不当な要求をしのぶ必要もない人は、幸いである」（G・H・L・ニコローヴィウス宛、1825年11月末?）。

要諦は、ここで、近代科学にもとづく19世紀の科学技術の進展が「道徳上のこと」にまで押し広げて捉えられ、「自然」との関連において大きな危惧の念をもって考量されていることである。同じ年、友人の作曲家ツェルターに宛てた書簡（6月6日付）では、こう書かれている。「富とスピード、これこそ世の人びとが賛嘆し、誰もが求めているものです。鉄道、急行郵便、蒸気汽船、ありとあらゆる便利な通信手段を教養ある人びとはわれ勝ちに求め、結局は行き過ぎ、教養をつみ過ぎたあげく、かえって凡庸にとどまってしまうのです」。その彼の現代をゲーテは――時代を終焉を予感しながら――「有能な頭脳のための世紀、呑みこみの早い実際的な人間のための世紀」として憂慮している。

むろん一人の科学者（というより「自然研究者」）として、ゲーテが科学技術の進歩をはじめ、アクチュアルな諸問題に無関心だったわけではない。たとえば最晩年、当時話題になっていたパナマ、スエズ、ライン＝ドナウ運河の建設に大いに注目し、「これ

36) 鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会』河出書房新社、1992年、50頁参照。

ら三大事業を目の黒いうちに経験したい。そのためならあと 50 年ほど我慢して生きてもいい」(エッカーマン『ゲーテとの対話』1827年2月21日)と壮語したゲーテは、海を征服し土地を拓こうと意欲をたぎらせるファウストその人を彷彿させる。またゲーテが、自然の破壊的な側面に無知で無関心だったわけでもない。むしろ大きな関心を寄せ、その猛威に有効に対処するには自然の法則を知悉し、それに倣う必要があると考えていたことは、『気象学試論』(1825)の以下のようにくだりに明らかである。

われわれが四大と呼ぶ自然は、あきらかに、隙あらば独自の不羈奔放な歩みをとろうとする衝動をもっている。人間は地球の所有権を手に入れ、それを維持する義務を負っている以上、この四大に抵抗する備えをし、警戒を怠らないようにしなければならない。しかし個々に予防策を講じてみても、無規則なものに法則をもって対抗することができなければ、けっして有効には働かない。ところがこの点で、自然はわれわれに実に素晴らしい手本を示してくれた。それも、無形態のものに形態のある生命を対置することによって。[……]

しかし、これまで考案されてきたことのうち最高のことは、自然がそれ自体のなかに法則や規則として包摂しているものを洞察したことであり、それあればこそ、われわれはかの無法則な制御しがたい存在をも圧倒することができるのである(「四大の抑制と解放」)。

一見「無法則」で「制御しがたい」ものとみえる自然現象の根底にあるのは、絶えざる創造と破壊。四季のめぐり、——芽生え、花咲き、実を結び、そして枯死して種を残す——植物の一生に象徴される「循環」である。そこでは「死」もまた生ける自然の不可欠の要素であり、同じ思念は、芸術を一面的に自然の模倣ないし美化と捉える啓蒙主義美学者 J・G・ズルツァー(1720-79)の『美術』を批評した若き日の書評にすでに窺うことができる。

わたしたちに不快な印象をあたえるものも、自然のうち最も好ましいものと同じように、自然の計画に属してはいないだろうか。荒れ狂う嵐、洪水、噴火、地下の灼熱、そしてすべての四大にひそむ死もまた、ゆたかに実った葡萄山や、かぐわしいオレンジ畑に燦然と射し昇る朝日と同じように、自然の永遠の生命を真に証しするものではないのか(「ズルツァーの『美術』」1772)。

暴力や破壊、「死」をもはらむ「力を呑みこむ力」（同上）としての自然、そこに生命そのものの本質、豊饒な働きを見るゲーテの自然観・宇宙観は、死の前年に吐露された——底の浅い「人間中心主義」とはほど遠い——つぎのことばにおいて、究極的な表現に達していると思われる。

とかく人間は、自己を天地創造の目的と考え、他のいっさいのものはただ自己との関係において、それが自己に奉仕し、役に立つかぎりにおいて認めようとしがちである。人間は植物界と動物界を支配し、ほかの生物を格好の食料としてむさぼり食いながら、父のように自分のことを気遣ってくれるその神の慈愛をたたえている。[……]

しかし私は、世界に無尽蔵の生み殖やしてゆく力をあたえた者を神として崇拜する。その力の百万分の一だけでも生命をあたえられれば、世界は生き物でいっぱいになり、戦争も、ペストも、洪水も、火事も、その世界をどうすることもできない。これこそが私の神だ（エッカーマン『ゲーテとの対話』1831年2月20日）。

ここにいう、世界にあたえられた「生み殖やしてゆく力 Produktionskraft」とは、否定の霊としてのメフィストの自己紹介を契機にファウストが口にした、「永遠に休むことなく／めぐみゆたかに創造する偉力」そのもの——メフィストが自らを称して「あの力の一部」という「あの力」にはかならない。創造と破壊、生成と消滅が一体となった、宇宙の循環的な二元的なコスミックな力による「永遠の創造」にとって、メフィスト的「破壊・消滅」もまた不可欠なその「一部」である。彼みずから「つねに悪を欲して、しかもつねに善をおこなう」と自認するゆえんであり、「天上の序曲」の主が「およそ否定をこととする霊たちのなかで、／このいたずら者はわしにはいちばん邪魔にならない」（V. 338f.）という道理である。

そして、天上の「主」がキリスト教的・超越的な神ではないように、ファウストの「不死なるもの」が天使たちによって引き上げられてゆく先もキリスト教の「天国」ではない（ゲーテは「魂」という語を慎重に避け、もともと「不死なるもの」は草稿では「ファウストのエンテレヒー」となっていた）。シュトゥルム・ウント・ドラング期のヴェルテルの汎神論的自然観——彼は周囲の草や木、虫や小動物のすべてに生命の輝きを見、いっさいを創造された「全愛者の息吹」を感じる——や、「信仰のこと」を問われてファウストのふるう長舌の「とても美しくて、結構な」ことばに窺われ

るように、スピノザやライプニッツに共感するゲーテにとっては、みずからを生みだし受け入れる世界と自然そのものが「私の神」なのだ。ゲーテはヤコービの「神なものについて」を論評したことばのなかで「自然のなかに神を見、神において自然を見る、これが私の全存在の基礎をなしている」（『年代記録 1811』）と書いている。

人間も生き物として、自然から生まれ、自然のなかで限りある生命^{いのち}を生きて、「永遠にして女性的なるもの」たる自然へと還ってゆく。ヘレナの消失にあたって共に「黄泉の国」へ帰ることを拒む侍女たちは、「名をあげもしなければ、気高い願いをもってもいない」（V.9981）けれど、「永遠に生きてはたらく自然を待みに」（V.9989ff.）「自然へと身を投じ」、木の精や山の精、泉の精や葡萄の精に変身する。かくて、巧まずして「永遠なるもの」の流れに融け入るのだ。——「それは新しい種類の不死性ですね」というエッカーマンのことばを、ゲーテは賛意をもって諾っている（『対話』1827年1月29日）。そして、「新しい種類の」という表現がいみじくも告げているように、正統的なキリスト教の立場からすれば、あきらかにそれは異端といえる自然観・宗教観であり、そこにゲーテという存在の意義と面目もまたあろう。

そして、近代科学とは一線を画するこうした独自の自然観・宗教観が、やはり彼の固有な時間意識と無関係であるはずはない。日本におけるゲーテ自然科学研究の泰斗高橋義人は、「たしかに、ゲーテには時間を循環しつづける円環と捉えているところがある」³⁷⁾と述べているが、ゲーテ自身、いわばこの「円環的」時間の信奉を簡明に語ったことがある。『詩と真実』『第三部』（1814）には、青年期の『若きヴェルテルの悩み』（1774）に関連して、60代半ばの詩人のことばとして、つぎのような一節を読むことができる。

生の快適さはすべて、外界の事物の規則的な回帰にもとづいている。昼と夜、四季、開花と結実の循環、その他われわれが楽しむことができ、またわれわれを楽しませるように、時節ごとにわれわれに巡ってくるもの、これが地上の生の本来の原動力である。これらの喜びに心が開かれていればいるほど、われわれはいっそう幸せを感じる。しかし、これらの多様な現象がわれわれの前で生起するばかりで、われわれがそれに何の関心ももたず、われわれに差しだされる、かくも快きものをわれわれが感受しなくなるとき、最大の不幸、最悪の病があらわれる。生が厭うべき重荷と思われるようになるのである。

37) 高橋義人『形態と象徴——ゲーテと〈緑の自然科学〉』岩波書店、1988年、277頁以下。

書齋に引き籠って「美しい世界」(V.1609)のすべてを呪う学者ファウストを、そしてメフィストに誘いだされ、「活動的生 *vita activa*」を全力で駆け抜けたあげく、死を前にして「憂い」に捕らえられる老ファウストを襲う「病」もまたそれであろう——。もっとも、かなわぬ願いではあったが、最後の最後にファウストは「魔術」と手を切って「自然」との本来のすこやかな関係を回復したい、と希求するのであるが。

おれは、まだ自由の境地をたたかいとっていない。
そうだ、おれはおれの歩む道から魔術を遠ざけ、
呪文など、すっかり忘れてしまいたい。
そして自然の前に一個独立の男子として立つことができたら、
人間として、ほんとうに生きる甲斐もあるというものだろう。 (V.11403ff)

ゲーテ自身は、近代化の流れを押しとどめることはできないことを十分承知していたが、ここには近代科学技術にたいする彼のアンビヴァレントな姿勢をはっきりと読みとることができる。そして、にもかかわらず、究極的に彼が「自然」の側に立っていることもまた疑う余地がない。

* * *

ついで鷗外の「自然観」についても瞥見してみたいが、それは独自の困難を伴っている。管見の限りでは、直接「自然」について触れた鷗外の発言が極端に少ない。え、明治の翻訳語としての「自然」の意味するものと、開化以前から存在した伝来の「自然」の語の意味するところが大きく食い違っているのである。この問題が典型的な形であらわれたのが1889（明治22）年、巖本善治の発表した論文「文学と自然」に、すぐに鷗外が『『文学と自然』ヲ読ム』によって反論し口火が切られた、いわゆる「文学と自然」論争である——。

まずは、近代以前の日本人の「自然」観について、唐木順三はこんなふうに書いている。

「自然」といふ言葉や文字は萬葉集にも出てきてゐて、その後も使はれてゐないことはないが、頻度は少ない。それも多くは、おのづから然り、みづから然り、といふ意味において使はれてゐる。『保元物語』以下の軍記物に、「自然のことあらば」といふやうに使はれてゐる場合は、「萬一のこと、不慮のことがあつた場合は」といふやうな意味である。……そういふ「自然」の使ひ方はあるが、対象としての自然、人間と対立したり、また人間をそのうちに包んだりしてゐる自然と

しての自然を、自然といふ文字や言葉で示してゐる例は近代にいたるまでは殆ど無い（「自然といふこと」³⁸⁾。

要するに、明治中期に外来語の^{ネイチャー}natureを「自然」と訳すまでは、日本語に今日的な意味における自然という語は存在しなかったというのである。哲学者内山節は「そのことは日本の人々のなかに、今日の自然を意味する概念がなかった」ことを示しているとして、その理由をこう解説する。「日本では自然と人間は別の概念でも、対立概念でもなく、共同の時空のなかに存在し、お互いに関係しあいながら存在しつづけるものだったのです。自然との関係のなかに、人間は存在していたのです。ですから、自然を客観化し、客観的にとらえることなど不可能であり、そのことが自然総体を客観的にとらえる言葉を成立させませんでした」³⁹⁾。

畢竟するに、これは単に言葉の問題ではなくて、「近代化」とともに日本人の自然に対する関係も否応なく根本的な変質を被らずにはいなかった、ということである。

さて、巖本と鷗外の論争に返るが、両者の論文の内容に直接立ち入ることは控え、柳父章『翻訳語成立事情』⁴⁰⁾に拠って、ここでの問題に論点を絞って摘記してみたい。

結論を先取りしていえば、柳父の指摘するとおり、「論争」はまったくの「すれ違い」に終わっている。原因は、同じ「自然」という語を使いながら、その語によって二人の意図するものが基本的に違っていたというのである。巖本の論旨を端的にいえば、「最大の文学は自然の儘に自然を写し得たるもの也」ということだった。これに対し鷗外は、哲学や文学は「自然」とは別の「精神」^{ガイスト}を写すのだ、というのである。

ここで明らかなように、鷗外の言う「自然」とは、今日「自然科学」と言うときの「自然」である。つまり nature の翻訳語としての「自然」のことである。nature は当然、客観的存在であって、人間の「精神」とは対立する。

さらに柳父はことばを継いで、「nature は客体の側に属し、人為のような主体の側と対立するが、伝来の意味の〈自然〉とは、主体・客体という対立を消し去ったような、言わば主客未分、主客合一の世界である」という。

38) 唐木順三『日本の心』筑摩書房、1965年、44頁以下。

39) 内山節『子供たちの時間』岩波書店、1996年、207頁以下。

40) 柳父章『翻訳語成立事情』岩波新書、1982年「7 自然」、125-148頁。

二人の論争を通じて、巖本の「自然」は、基本的に日本語の伝統的な意味であり、鷗外の「自然」は、*nature*と同じ意味であった。そして、ここで重要なことは、そのことに、二人ともまったく気づいていなかった、ということである。論争はどちらの勝ちでもない。ことばの意味をめぐるすれ違いにすぎなかった。

「すれ違い」に終わった論争をつうじて浮かび上がってくるのは、逆説的に、すでに鷗外のうちで *nature* の訳語としての「自然」、すなわち西欧近代的な「自然」の概念がいかに自明化し「客観化」していたか、ということである。しかも、そのことに「まったく気づいていなかった」という事実は、二重に「そのこと」を証しするものであろう。柳父は、科学上の用語としての「自然」については、鷗外の「『文学ト自然』ヲ読ム」が、明らかな意味で使われている例としては最も早いものであろうと述べ、「じしん〈自然〉」科学者でもあった鷗外が、科学の対象である *nature* を、はっきりと〈自然〉と訳していたのである」と補説している。「作家」鷗外の尊重する「自然」が、まずは「歴史の〈自然〉」（歴史其儘と歴史離れ）であつたという逆説も彼の科学者としての資質を証していよう。

ところで、この鷗外の「自然観」（そしてそれに呼応する近代的「時間意識」）が、執筆中の『灰燼』を挫折させた、といえは牽強付会、論理の飛躍だろうか——。明治天皇の崩御と乃木希典夫妻の殉死という歴史的事件に遭遇して、決定的に一時代の終焉を直感した鷗外の前に、「死」が「一切ヲ打切ル重大事件」（「遺言」）として立ちはだかる。鷗外が「自然」から「歴史」の側に決定的に押しやられる瞬間でもあった。そしてその時、節蔵を「悪のヒーロー」に、本格的な長編小説を構想していた鷗外にとって、己れの「分身」でもある主人公の「救い」は——ゲーテにとってのファウストの場合同様——緊要であった。

ファウストの「救済」について、完結した芸術作品としての「すべての論理を無視した」、「死の足音を耳に聞く老ゲーテの、譲ることのできない絶対的要請」⁴¹⁾ととる解釈があるのは、たしかである。それにしてもゲーテには、一方で「私はわれわれの永生を信じて疑わない」（エッカーマン『対話』1829年9月1日）という強烈な自我意識と、それを支える「自然」に寄せる絶対の信頼があった。だが鷗外の場合、救いはどこからも期待できそうになかった。「柔和忍辱の仮面を被って」「終始何物かに策うたれ駆られているように」齷齪と生きてきた、その生じたいが彼にはどこか仮のもの

41) 柴田翔『闊歩するゲーテ』筑摩書房、2009年、224頁（初出は『集英社 世界文学大事典 2』1997年、「ゲーテ」の項）。

のようにみえてくる。医学という最も自然科学らしい「精密な学問」を修めた身として、「凡ての人為のもの無常の中で最も大きな未来を有しているものの一つ」として科学を恃むのは無理からぬとしても、近代科学そのものが両義的であることは見てきたとおりである。高橋義孝の評語「そしてあらゆる自然科学には、いつもひとりのメフィストーフェレスが隠れている」⁴²⁾は、そのことの端的な表現である。

それでは、鷗外にとって、永遠にして「女性的なるもの」は救いの契機たりえただろうか。娘の小堀杏奴が母から聞いたこととして回想に記した話によれば、鷗外＝林太郎は——それを我が目で見届けぬうちは死んでも死に切れぬ、とでもいうように——、「死期の迫った一日、……母に命じて、独逸時代の恋人の写真や、手紙類を持って来させ、眼前で焼却させた」⁴³⁾という。節蔵には、お種さんとのあいだに、そもそも愛の形見といえるような思い出の品も記憶もなかったであろう。ましてや、「燃えるような怒の目」で再会に応えた女が、当のその男の救いを代願するなど、(虚構の上のこととしても)考えられなかったであろう——。

ゲーテは、「女は裁かれた」というメフィストの台詞で終えていた若き日の『ウルファウスト』を60歳を前に書き換え、「救われた!」という「上からの声」を書き加えると同時に、去ってゆく恋人を気遣う、情愛と憧れの入り混じった「ハインリヒ!ハインリヒ!」という哀切きわまる「牢獄」からの呼び声で「第一部」を閉じている。——呼応するように、悲劇に終わりをはしたが、この彼の「アウロラの恋」、「こよなき宝」は早くも「第二部」第4幕冒頭「高山」の場で、柔らかな霧が形をとった「愛らしい姿」となってファウストの追憶のうちに甦り、彼の「心のなかの最善のものを、ともに高みへと引き上げてゆく」(V. 10066)。

ゲーテは『箴言と省察』のひとつで「人生の最後をその最初と結びつけることのできる者は、この上なく幸せな人間だ」(ヘッカー、140番)と記している。晩年の思想詩「流転のなかの永遠」(1803?)の最終連は、つぎのように結ばれている。「始めと終わりとを／ひとつに結び合わせしめよ!／……/詩神の恵みに感謝するがよい。さればこそ/移ろわぬものが約束されるのだ/汝の胸には内容が/汝の精神には形式が」。——『灰燼』は、やはり中絶されるほかなかった。

それでは、ゲーテは「ニヒリズム」とまったく無縁でいられたのだろうか。明治43年前後から死まで、鷗外を覆ったある種の「心の空虚」(『妄想』)、木下空太郎のいわゆ

42) 高橋義孝『森鷗外』(一時間文庫)新潮社、1954年、51頁。

43) 小堀杏奴『晩年の父』岩波文庫、1981年「あとがきにかえて」(初出は「諸君!」昭和54年1月号)。

る「悲哀に似る一種の気分」「寂しみの情緒」⁴⁴⁾は、ゲートには縁のないものだったろうか。——そうではないであろう。「流転のなかの永遠」の第一連をゲートはこう書きだしている。「この春の恵みを ああ／ほんの一時でもとどめられたら！／だが 梢を揺する暖かい西風に／早くも 吹雪となって舞い散る花」。——どこか西行の「花を散らす」春風を連想させましょう。長寿に恵まれるということは、幾多の親しい、愛する人たちに先立たれることでもある。無常との対決・克服は、晩年のゲートにとって避けがたい深刻な問題であった。

『修業時代』第6巻「美しい魂の告白」には、修道女の視点から彼女の父、「塔」の「教養理想」の体現者と目される「大叔父」の最期が語られている。近づく自らの死の予感と、重なる身内の不幸とによって、さすがの大叔父もすっかり気弱になり、ふさぎ込みがちになる。そんななか、修道女は、彼女の甥にあたる（後に「塔の結社」の中心になる）ロターリオの誕生の報を受けた父の様子をこう記す。

子供を一目見るなり、父は信じられぬほど満足げで嬉しそうな顔になりました。洗礼のときは、日ごろに似合わずまるで有頂天になって、いいえ、顔を二つ持った守護神とでも言いたいくらいでした。一つの顔は、前方の、やがて自分が入ってゆこうとしている彼方の世界を嬉々として眺め、もう一つの顔は、自分の血をひいた男の子のなかにいま始まったばかりの、新しい、希望に満ちた地上の生活を眺めているのです。

いみじくも双面神ヤヌスになぞらえられるように、あらゆる生きものには二つの生命がある。ひとつは、生まれ、老い、死で終わる個体としてのそれであり、いまひとつは、種としての生命、つまり、死が生の始まりともなる、連綿と連なって途絶えることのない生命である。そこでは、現在は未来へと接続されることによって生き続け、しかもその生命を個は、一つまたひとつと過去から繰りだされる永遠の生の鎖から受けとっている。そして、このような想念には、たしかに慰めがある。——家に帰り着いた修道女の父は、「これまでよく感じていた死の恐怖はどこへいってしまったのだろう。どうして死の怖いことがある。……わしには永遠の生命がある」といって、平静に死を迎える。

44) 木下空太郎『森鷗外』（岩波講座「日本文学」）岩波書店、1932年、37頁。

教訓詩「植物の^{メタモルフォーゼ}変態」(1798)は、イタリア旅行(1786~88)以降、ゲーテの打ち込んだ植物研究の成果でもあるが、つぎの一節は孫の洗礼に立ち会う修道女の父の感懐の正確な反復であり、その客観化にすぎない。

そして自然はここに久遠の力の環を結ぶ——
だがすぐ新しい環が前の環を受けついで
果てしない連鎖があらゆる時を貫いて伸び
全体も個もともに生きつづける

生々流転する有機体の生命のなかに、いわば形成する時を見いだしたのは^{モルフォローグ}形態学者ゲーテであったが、同時にその目は、いっさいの生成の奥にひそむ恒常の相をひとと見据えている。若き日の文通の友「グストヒェン」に宛てたつぎの書簡は、往時から40年を経て、いまはフォン・ベルンストルフ未亡人となっている70歳の彼女からの来信に返したものである。

長生きするという事は、ずいぶんたくさんのもよりも生きのびるということです。愛する人、憎んでいた人、どうでもよい人、王国、首都、若い頃に種をまいて育てた森や木々、皆そうです。私たち自身が老朽化してしまうのですが、肉体と精神の賜物がまだ少しでも残っていれば、まだまだありがたいことだと思うのです。こういう移ろいゆくものはすべて甘んじて認めましょう。永遠なるものがあらゆる瞬間に現前していさえすれば、はかない時間のために思い悩むことはありません(1823年4月17日付)。

「科学になにかある種の全体性を期待するなら、科学も必然的に芸術として考えなければならぬ」(『植物学のための諸論考』『問題と回答』1823)というゲーテである。詩「流転のなかの永遠」において「移ろわぬもの」を約束してくれる、と謳われたのも「詩神の恵み」——学問と芸術をつかさどるミューズたちであった。結局、最終的に彼を「ニヒリズム」から救ったのは、「科学者」ゲーテのなかの「詩人」であったろうか。あらゆる幻想をもたず、「無」へと「醒覚」する冷徹な知性には不可能な、創造的な知性と想像力、そして「エロス」のはたらきである。

最後に、ゲーテにも造詣が深かった哲学者三木清(1897-1945)の『人生論ノート』(1947)から、死と永生にかかわる含蓄の深いことばを引いておきたい。

執着する何もものもないといった虚無の心では人間はなかなか死ねないのではないか。執着するものがあるから死に切れないということは、執着するものがあるから死ねるということである。……私に真に愛するものがあるなら、そのことが私の永生を約束する。
（「死について」）

この章から『人生論ノート』を書きだした三木清は、彼の「こよなき宝」、妻・喜美子を死によって亡くしたばかりであった。

付記 本稿における『ファウスト』解釈は基本的に拙著『「ファウスト」研究序説』（鳥影社、2016年）に依拠しており、部分的に記述の重複する箇所があることをお断りしたい。